中国貨幣の歴史

7　秦の貨幣統一②　－秦の貨幣統一政策とその実態－

秦の半両銭

戦国時代後期に登場した秦の方孔円銭。出土地が戦国時代の秦の領域に限られているほか、大きさや重量はさまざまで時代を経るに従い軽量化する傾向にある。

私鋳銭

民間で鋳造された半両銭（私鋳銭）。秦帝国末期には盛んに鋳造され、秦の半両銭とともに流通した。

（写真は全て実物×1.0）

始皇帝は、紀元前221年の天下統一後、政治・経済両面での統一事業を進め中央集権体制を固めていく。貨幣については、秦の「両銖制」を中国全域に拡大する度量衡の統一で対処した。天下統一以前から秦で使われていた「半両銭」を基準とし、一定の比率により既存の各種貨幣との交換を可能とするかたちでの貨幣統一であった。

戦国時代（紀元前403～221年）の貨幣は、黄河流域の中原諸国を中心とする布幣、黄河流域東部および北部の刀幣、南方の揚子江流域を中心とする楚の銅貝（蟻鼻銭）に加え、戦国時代の中期（紀元前4世紀頃）以降は円銭も流通していた。貨幣を統一するためには、中国各地で既に流通していた布幣、銅貝などに置き換わるだけの大量の「半両銭」が必要となるが、「半両銭」の大量鋳造が容易でなかったことは想像に難くない。また、秦の度量衡「両銖制」をほぼ中国全域に拡大して、「半両銭」と各種貨幣相互間の交換を可能としたため、貨幣統一は喫緊の問題とはなっておらず、秦は天下統一後直ちに「半両銭」による貨幣統一には着手しなかったものと考えられている。このように秦帝国の成立段階では、戦国時代からの各種貨幣が「半両銭」とともに流通する状況であった。なお、戦国期の秦で「布」は貨幣（「中幣」）とされていたが、秦帝国段階では、布は貨幣とされず、「半両銭」を統一銭貨（「下幣」）とし、斤を単位とする「金」を「上幣」と定める貨幣制度になっていたと考えられている。

もっとも、戦国時代から天下統一後にかけて、「半両銭」の形状・名目価額は維持されつつも、その重量は軽量化したほか、民間での私鋳も横行することとなった。また、天下統一後は、税の徴収や商取引の面でも銭貨の統一を実現する必要性が認識されるようになった。

「半両銭」による全面的な銭貨統一が決定されるのは、始皇帝の死の年であった。天下統一後12年を経過した紀元前210年、始皇帝が死亡し二世皇帝が即位したこの年に、ついに秦は「半両銭」による貨幣統一を決定し、強力に推進しようとした。しかし、二世皇帝の即位後、ほどなく陳勝・呉広の乱が勃発、これをきっかけとして各地で反乱が相次ぎ、紀元前206年、秦帝国は崩壊した。このため、秦が打ち出した「半両銭」による貨幣統一は実現には至らず、漢の時代に引き継がれる結果となった。

「半両銭」の出土状況によると、その出土地域は主に戦国時代の秦の領域にとどまり、「半両銭」はまだ地方貨幣にすぎなかったことが知られるようになっている。

［山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館］

【参考文献】

稲葉一郎、「秦始皇帝の貨幣統一」、『東洋史研究』第37巻第1号、1978年
彭　信威、『中国貨幣史』、上海人民出版社、1965年
加藤　繁、『中国貨幣史研究』、東洋文庫、1991年
林巳奈夫、「戦国時代の重量単位」、『史林』第51巻第2号、1968年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年